あとがき

全学共通カリキュラム運営センター朝鮮語教育研究室主任／
外国語教育研究センター教授　佐々木 正徳

『大学教育研究フォーラム』第 26 号は、時代の影響を大きく受けた構成となった。言うまでもなくコロナである。「学びとは何か」という問いは古今東西存在しているが、オンライン授業への「強制的」な転換により、期せずして大学での学びの意義について考えた方も多かったのではないだろうか。個人的には、早め早めに仕上げなくてはならなくなった授業資料の作成に悪戦苦闘しながら、ペンディングし続けてきた問いへの回答を迫られているような、そんな気になった年度であった。今号では、最初の特集（座談会）、シンポジウム筆録がともにオンライン授業が中心的なテーマとなっているだけでなく、以降の多くの記事でもコロナの影響やオンライン授業について触れられている。まだ記憶が鮮明なこともあり、読んでいると自己の経験が思い出され、なるほどこうすればよかったのかと反省することしきりである。

また、2020 年度は全学共通カリキュラム運営センターに関係する、もう一つ大きな変化があった。外国語教育研究センター（FLER）の設置である。これにより、これまで異文化コミュニケーション学部の教員が中心となって運営してきた全学共通カリキュラムでの言語教育が、FLER の教職員によって、より専門的に担われるようになった。これは、（少し大げさに言えば）「グローバル」が避けて通れなくなった現代の高等教育における、立教大学の所信表明と言えよう。FLER のモットーの一つに複言語主義がある。詳細は別の機会に譲るが、複数の異なる言語の素養がグローバル社会で生きていく上で有用であるという立場である。FLER の当面の課題は 2024 年度から実施される新カリキュラムの策定であり、複言語主義をふまえ、立教大学が目指す「専門性に立つグローバル教養人」の育成、「『新しい』グローバルリーダー」の育成に、どのように寄与するか議論が交わされている。特別特集では、新旧言語チームリーダーの対談と、言語教育研究室の座談会が掲載されており、議論の一端を垣間見ることができる。

教職員だけでなく学生にとっても手探りであったであろうオンライン中心の一年。本号で語られる経験を共有し、省察し、これからの糧とするなら、「全カリは広場（フォーラム）である」（初代全カリ部長、寺﨑昌男先生）という金言は現実となるであろう。後年、2020 年度が立教大学の教育が発展した分水嶺であったと語られることを願ってやまない。

ささき　まさのり